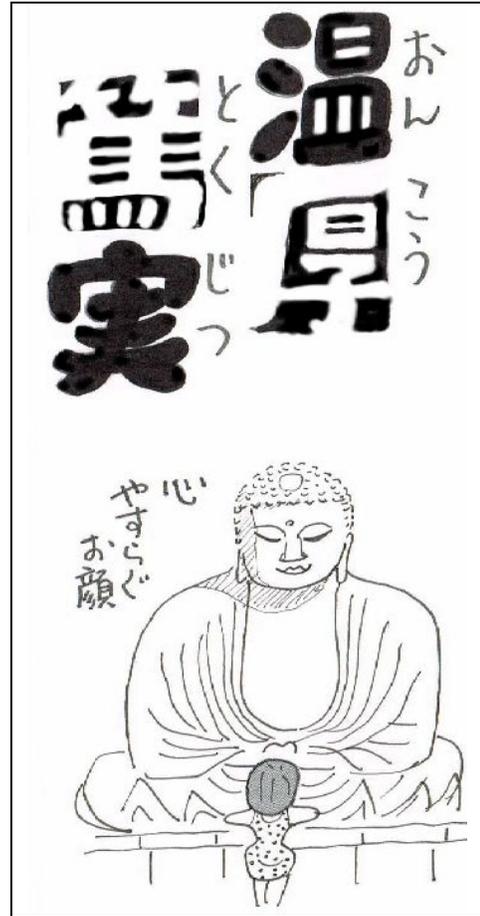


わたくしは上司に恵まれていない。課長はヤな奴だ。一言めには、そんなことではないお嫁さんになれないぞと言う。あたくしがいい嫁さんになろうがなるまいが、あんたに関係ないだろーと肚の中で毒づく、ことばには出せないの。目の吊り上がったキツネ顔が課長席に座っている姿を想像すると、会社に行く気が萎える。萎えるがお給料をもらわないとローンが払えないので通勤電車に乗る。

たまには職場の飲み会にも付き合い合わなくてはならない。酒が入るとすぐ熟柿のような赤ら顔になる課長は、決まって「結婚だけが人生じゃないなんてほざくのがいるが、女性は結婚しなくてはいけない。結婚しない女性は、バスに乗り

先週のお返



おくれた日暮れのおばさんになる。そうなりたくないだろう」とあたくしにキツネ顔で説諭するのが常で、白ける。

「人生に後悔しないためにも、結婚はするもんだ。うんうん」と自分で言っただけで頷くクセがあるのも癪にさわる(あんなの奥さんはキツネと結婚してしまっただけで後悔してんだよ)と、やはり声を出さずに肚の中で毒づく。

さらに直属の部長には身の毛がよだつ。タヌキ顔で好色。某国立大学卒を鼻にかけて、わたくしのような一般事務職員は歯牙にもかけないような素振りではないながら、いっただったか残業を命じられて、おそくなつたから食事をして帰ろうと誘われ、体を求められたので張り倒して逃げ帰ったことがある。

取締役役目前だったタヌキは何もなか



ったように、次の日部長席で鼻毛をぬいでいたので、ほっとしたが。

何が言いたいのかと言うと、わたくしは今、江ノ電に乗って鎌倉の長谷の大仏の前に来ている。大仏さまのお顔を見にキツネやタヌキを忘れさせてくれる濃厚で篤実なお顔を見に。月に一度は来る。慈愛に満ちた柔和な顔を見ながら、こんなお顔の上司だったら職場も、会社全体もあたくしの毎日もどんなにすばらしいだろうと、大仏さまの顔を見上げていざうと、大仏さまの顔を見上げて掌を合わせ、あたくしは明日への活力の源にしているのです。

「ありがたい」と言っ

